

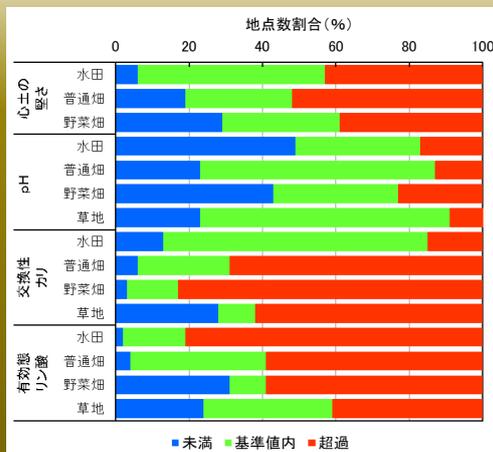
# 食を育む北海道の耕地土壌の現状

## 概要 Abstract

道総研農業試験場は、1959年以来長きにわたり道内耕地土壌の実態調査を続けてきました。より効率的な生産と環境への寄与を両立させる理想の土づくりに向け、現状の姿を知り、土壌の価値をより高めて、次代につなげるための情報を整理しました。

## 成果 Results

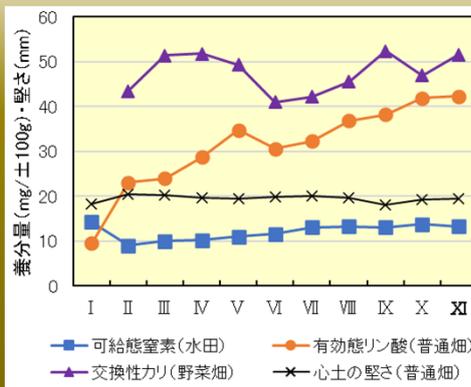
### ▼現状土壌診断基準値との比較



土壌診断基準値とは、作物の良好な生育と収量を得るために望ましい範囲を示したものです。

心土が強く、酸性が強く、養分が過剰に蓄積している圃場がまだまだ多くあります。

### ▼土壌の養分含量や堅さの変化



I～XIは調査した時期で、I期は1959～1975年の調査、最新のXI期は2020～2023年の調査で、各期の間隔は4～5年です。

長期的にリン酸の蓄積が進んできましたが、窒素やカリ、心土の堅さを含め、近年は横ばいで、地力低下など土壌が悪化してきた様子は見られません。

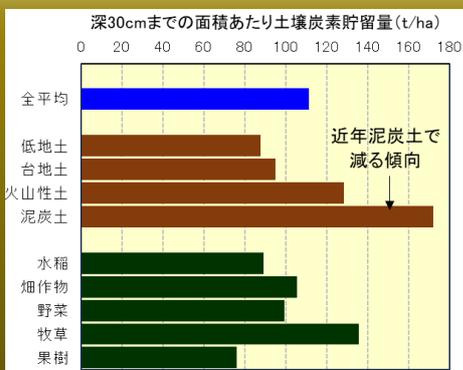
### ▼土壌の養分含量から推定したリン酸減肥可能量



減肥可能量とは、実態施肥量から、適正施肥量（本調査による土壌のリン酸レベルを基にした計算値）を差し引いた量です。

全道で施肥の適正化（減肥）を進めると減肥可能量は減少します。現場では施肥量が減少傾向で、徐々に適正化が進んでいます。

### ▼北海道の耕地土壌の炭素貯留量

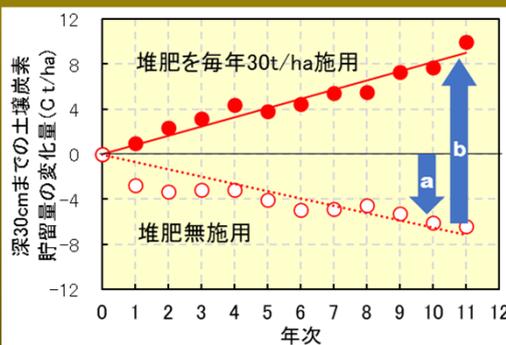


全道耕地 114万haでは  
 CO<sub>2</sub>換算 4.85億トンの貯留  
 北海道の年間CO<sub>2</sub>排出量の10倍  
 全国耕地貯留量の37%

近年泥炭土で減る傾向

### ▼堆肥施用の有無と土壌に貯留された炭素量の変化

中央農試の褐色低地土でたまねぎを連作した試験です。



有機物を施用しないと貯留された炭素は徐々に減っていきます(a)。しかし堆肥を施用することで減少分を補えます(b)。

堆肥の毎年10(t/ha)以上の施用は、農地の炭素隔離対策の一つとして重要です。

## 普及 Dissemination

1. 耕地土壌の適正な管理および肥沃度維持のための基礎資料として活用します。
2. 土壌炭素貯留量は、国から国連への報告に反映されるとともに、農地の環境価値向上に役立ちます。

## 連絡先 Contact

中央農業試験場  
 農業環境部 環境保全グループ  
 0123-89-2001  
 central-agri@hro.or.jp